

北方動乱編

# BLACK DOGS

ブラックドッグズ4



黒ねこ作

Illust ムク

# Black Dogs 4

- 北方動乱編 -

黒ねこ作  
イラスト／ムク

## 【目次】

プロローグ	10
第一章 最北の独立国	16
第二章 恩師の貌	84
第三章 皇國統一戦線	152
第四章 レッドアラート	212
第五章 闇の奥	258
エピローグ	318
あとがき	330

## 【登場人物一覧】

### 【八倉 直人】(ヤグラ ナオト)

モグリ義術医を営む青年で、本シリーズの主人公。  
第四次世界大戦中は「暗殺者」と呼ばれた元特殊工作員。  
雪島沙希の死を切っ掛けに特務機関から脱走した。  
レイヴンと親友以上恋人未満の関係にある。

### 【レイヴン】

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』のフィリピン系少女傭兵。  
特殊部隊出身、近接格闘戦が得意な義術強化猟兵。  
本シリーズのヒロインであり、直人と同棲している。

### 【東明寺 紅音】(トウミョウジ アカネ)

第307特務機関の元情報分析官だった美少女。  
サイバー戦と情報分析のプロで特殊な技能を持つ。  
直人を何年も想い続け、特務機関の脱走時は手を貸した。

### 【サーニャ】

レイヴンに懐いて行動を共にするロシア人の少女傭兵。  
肉体は十四歳だが、ある事情から精神年齢は六歳止まり。  
純真な性格で教えられた事は素直に吸収する良い子。

### 【雪島 沙希】(ユキシマ サキ)

第307特務機関で元情報分析官だった天才少女。  
直人の元相棒で親友。初恋の相手だった。  
八倉夫妻の死に関する件を調査中、軍部から暗殺された。  
享年20歳。直人に最期を看取られて他界した。

## 【登場人物一覧】

### 【神近 梓】(カミチカ アズサ)

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の社長で女傭兵。  
戦時中、旧日本国防陸軍で第113特殊戦闘部隊を率いた。  
「少佐」が呼び名の最強かつ最凶の傭兵。私生活はダメ人間。

### 【ナタリア・クライン】

ロシアマフィア『ワルシャワゲート』の幹部。  
日本支部の副支部長で、モデルじみた金髪美女。  
ロシア陸軍スペツナズの元大尉で拷問のスペシャリスト。

### 【榊 三月】(サカキ ミヅキ)

第307特務機関の元技術担当官だった少女。  
直人の親友でメカに深い愛情を持つプロの整備士。

### 【雨宮 遥】(アマミヤ ハルカ)

第307特務機関の元特殊工作員だった少女。  
男勝りな性格だが、夫の純太にはめっぽう弱い。

### 【城坂 純太】(キサカ ジュンタ)

第307特務機関の元特殊工作員だった青年。  
直人の戦友で士官学校の成績を競い合った仲。  
戦後、妻の遥とダイニングバーを経営している。

### 【名城 由香里】(ナシロ ユカリ)

国立札幌中央病院へ勤務する腕利きの義術医。  
北海道警察庁の要請で検視や司法解剖を行う検視医。

## 【登場人物一覧】

### 【萩元 理央】(ハギモト リオ)

旧日本国防陸軍の元大佐、北海道国の防衛大臣。  
北海道独立に貢献した英雄的な軍人として知られる。  
二大政党の片割れ、北海道民政党の現党首。

### 【小屋敷 歌織】(コヤシキ カオリ)

萩元の個人秘書。諜報特務庁出身の幹部職員。  
特務庁長官の深瀬善文と婚約関係にあった。

### 【深瀬 善文】(フカセ ヨシフミ)

北海道国諜報特務庁の元長官。小屋敷歌織の婚約者。  
敵の工作員を炙り出す極秘捜査を行っていた。

### 【諏訪部 九蔵】(スワベ キュウゾウ)

北海道国内務省の内務大臣。  
二大政党の片割れ、自由道民新党の現党首。

### 【曾我 征彦】(ソガ ユキヒコ)

北海道独立評議会の最高議長。北海道国、現政権のトップ。

### 【灘章 龍弥】(ナダアキ リュウヤ)

極右過激派『皇國統一戦線』の総裁で元軍人。

### 【ブルーノ・バクーニン】

煙草屋『バローナ』の店主でロシア系の武器商人。

## 【用語解説】

### 【義術医療】(ぎじゅついりょう)

西暦二〇二六年に登場したサイボーグ的な代替医療。全身義術化なら脳と脳幹を除く体の九割を人工化できる。外科医の八倉甚が開発し、一般的に「義術」と呼ばれる。数多の難病患者や傷痍軍人の治療へ貢献した医療技術。なお、義術化した人間を診る専門医を『義術医』という。

### 【特殊工作員】(とくしゅこうさくいん)

軍情報部や参謀部に所属する非正規戦専門の工作員。諜報活動、要人暗殺、破壊工作、敵地潜入が主な任務。諜報員と特殊部隊隊員の能力を兼ね備えた実動要員。日本国防軍の独自兵種で、海外では準軍事担当官という。

### 【義術強化兵】(ぎじゅつきょうかへい)

第四次大戦から登場した全身を義術化した兵士のこと。特殊部隊は兵士の体に高性能パーツを使うことが多い。義術強化兵に加え、義術強化猟兵、義術機甲兵、義術特殊兵の四種類が存在する。軍用の特殊部品『義術兵装』を使用するため、一般の人工パーツと違う機能を備えている。

### 【自律兵器】(じりつへいき)

第三次世界大戦から登場した人工知能搭載型兵器のこと。人間の脳をモデルに開発された人工知能を積んでいる。戦車、航空機、人型ロボットにまで応用された。第四次大戦では義術の登場で大半が支援機となった。

## 【用語解説】

### 【第四次世界大戦】(だいよじせかいたいせん)

西暦二〇四一年五月に事実上の終戦を迎えた世界大戦。

第三次世界大戦終結から五年後の大戦であり、現代の荒廃世界を作った原因。『101事変』を発端として約六年も続いた。

日本はアメリカを中心とするNATO諸国の支援を受け、ロシア、中国、南北朝鮮統一国と東アジアで戦った。

### 【廃都・東京】(はいと・とうきょう)

西暦二〇三五年十月一日に放棄された日本の旧首都。

『101事変』の象徴とも呼べる瓦礫と廃墟の都。

戦中から戦後にかけて闇社会が支配する街となった。

あらゆる悪徳が服を着て歩く街。現代のソドムとゴモラ。

### 【ワルシャワゲート】

元ロシア軍人を中心に構成された一大マフィア。

ロシア政府と闇の繋がりを持ち、世界中に支部がある。

### 【顔無し事件】(かおなしじけん) 〈Black Dogs 収録〉

特殊工作員『顔無し』が101文書を奪おうとした事件。

八倉夫妻の隠匿した文書には、第四次世界大戦の真相が書かれており、顔無しは公表による新政府の転覆を目論んだ。

しかし、八倉直人が顔無しを『亡霊部隊』ごと抹殺。

最終的に、直人と取引した『ワルシャワゲート』が各種特権と引換えで日本新政府へ文書を引き渡して事件は終息した。



「平和というものは、人間の世界には存在しない。しいて平和と呼ばれているのは、戦争の終わった直後、またはまだ戦争の始まらない時をいうにすぎない」

小説家 魯迅

北海道民主共和国の冬空を鉛色の雲が覆っていた。

とつくに正月飾りは街中から姿を消し、普段と変わらぬ早朝の首都『札幌』を静謐な沈黙が包んでいる。官公庁のオフィスが多い中心部へ向かう幹線道路も、登庁時刻より三時間も早いとなればガラ空きで、卸売市場から帰るトラックとすれ違うぐらいであった。

対向車のライトへ目を眇め、深瀬善文は眉間に皺を寄せる。

「斉藤君。この情報は確かか？」

左手にタブレットの軍用端末がある。三十二歳の自分より五つ下の補佐官が、五分ほど前に差し出したもので、やや薄暗い後部座席を明るい画面が照らしていた。

斉藤が四角眼鏡のブリッジを中指で押し上げ、深瀬の右隣から首肯する。

「長官。すべて事実です。我々とヒュドラの見解も一致しました。新政府の作業員は国内へ潜入後、諜報活動および軍事的な破壊工作の準備を行っていたと思われまます」

「そうか……」

「一昨日、協力者を特定しました。ここまで情報が揃えば十分ではありませんか？」

深瀬は政府と軍の情報機関を十年も渡り歩いたベテランだ。この手の案件を扱った経験を腐るほど持ち、部下の指摘を受けずとも事の重大さをよく理解している。

防諜のプロフェッショナル。斉藤は少なくとも己の上司をそう信じていた。深瀬は神妙な顔つきでタブレットの映した写真を睨む。

本来、防諜作戦は時間をかけて慎重に対策を進めてゆく。だが、敵エージェントの無力化といった「攻撃的カウンターインテリジェンス」では迅速な対応が要求される。

当然、反撃も視野に入れた積極的な行動が必要だ。これは、カウンターエスピオナージュと呼ばれる技法であり、深瀬自身も幾度となく実践してきた馴染みのやり方であった。

すでに下準備は整っている。ここでゴーストを出せば、優秀な部下達が日本列島最北の独立国を守るべく行動を開始するだろう。こちらの捜査も未だ気づかれた様子はない。

これは最大にして絶好のチャンスだ。自身の経験がそう告げている。ところが、深瀬は冷徹な理性へ抗うように命令を下さなかった。

「長官？ いかがされました？」

斉藤は上司の横顔を盗み見て気がついた。深瀬は一見すると深刻そうな顔で画面を見据えているのだが、厳しい眼差しの奥で後悔の念と深い悲しみが渦巻いていた。

当然、自分の上げた報告以外に心当たりはない。深瀬が最も信頼する人物が敵として載っているのだ。味方から「冷徹」と評された諜報員として、私情を挟めば躊躇いが生まれる。

なら、部下は職務へ忠実であろう。斉藤は自らへそう言い聞かせて口を開いた。「心中お察します。ですが、長官も予測しておられたものではありませんか？」

「……私の杞憂であればと願って命じた。結果はこのザマだ」

「お辛いのは重々承知しております。心を鬼にして下さい。独立戦争時に行われた虐殺行為をお忘れですか？ 新政府軍が数万の難民を殺戮した事件を」

「……………」

「長官。我々は自国の安全と独立を守る義務があります」

深瀬は瞑目した。わずかな逡巡を経て目蓋を開ける。

「そうだな。ありがとう斉藤君」

「いえ。これも仕事ですから」

「相変わらずだな君は……」

斉藤は深瀬から返された端末にタッチペンを走らせる。

「早速、実動チームとバックアップを招集します。今回は作戦三課と四課が適任でしょう。」

マスコミ対策は情報分析二課の人員を割くとして、内務省が厄介ですね。国家公安保障局が本件を嗅ぎつけているとは思いたくありませんが……」

「国公局は無視しろ。今は彼らも選挙絡みで忙しいだろう」

「そうだといいのですが……。ともかくオフィス到着後に行動を開始します」

「任せる。ただし、私が戻るまで実行は待つように」

斉藤は困惑した表情で振り返った。

「長官がお戻りになるまでとは？」

「これから防衛省へ向かう。まず、彼女に知らせておきたい」

「……萩元防衛大臣ですか」

齊藤が途端に渋い顔となり、深瀬は苦笑を見せた。

「長い付き合いだ。どんな人間かお互い心得ているよ」

「それは私も存じております。ただ今回は……」

「君の懸念は理解しているつもりだ。だが、彼女は統括室の室長だ」

上司の意思が固いことを悟り、齊藤は半ば諦め気味で頷いた。

「了解しました。長官のご随意になさってください」

「すまない、齊藤君。君には苦勞ばかりかける」

「おかげさまでやりがいがありますよ」

と、二人して笑い合う。すると車内が大きく前後に揺れて止まった。

深瀬と顔を見合わせ、齊藤は運転席の部下へ尋ねる。

「どうした。中島」

「それが、さっき変わった信号がいきなり赤に戻りまして……」

齊藤が窓から顔を出し、一通り視線を走らせて閉める。

「お前の見間違えだ。長官を乗せてるんだぞ。緊張感を持って」

「……申し訳ありません」

狐に化かされたような面持ちで、中島はハンドルを握り直して首を傾げる。

一方、深瀬は部下達のやり取りをよそに曇天を見上げた。

日本列島の上空が強い寒気へ覆われている影響で、今週から天気は下り坂になると昨晚の天気予報が伝えていた。今はまだ持ちこたえているが、きつと昼過ぎから雪が降る。

その頃には拘束した工作員の尋問を始めているはずだ。

さて、彼女にはどう話したのか……。

萩元とは旧知の仲だった。彼女は北海道を独立へ導いた女傑であり、正義と公正さを重んじる立派な元軍人だ。萩元なくして北方の独立と平和は成し得なかったことだろう。

現在、彼女は国家の代表を決める選挙へ出馬している。だが、この一件は彼女の足を引っ張りかねない。それだけは何としても避けたいものだと思っていた。

——ピシッと小石でも当たったような音が鳴った。

直後、運転席の窓へ血肉がこびりついた。クラクションが悲鳴のごとく喧しい音を鳴らす。

タブレットを手から取り落とし、斉藤は呆然と血塗れのバックミラーを見つめた。

「……中島？ どうした？ 返事をしろ中島！」

ほとんど弾かれるように飛び出した斉藤を、深瀬は一喝して止めようとした。

「外に出るなッ！」

その警告は些か遅すぎた。

風船を割るような破裂音に合わせ、こめかみから鮮血が飛沫いた。斉藤はカッと眼を剥き、最期の力を振り絞って手を伸ばしながら、ドア板へ縋りついて崩れ落ちる。

深瀬が座席の間へ屈み、スーツ上着のポケットから小型端末を掴む。警察、軍、オフィス

の番号を順にリダイヤルするも、すぐさま苛立ちを見せて切った。

「やられたな。先手を打たれた」

電話もネットもまともに使えない。強力なジャミングが一带へ仕掛けられている。

「……こちらが泳がされていたわけだ。斉藤君が浮かばれんな」

わざと捜査員を泳がせて逆に探りを入れていたのだろう。拳句、斉藤か自分あるいは両方を監視していたと見える。でなければ、このタイムミングの襲撃はありえない。

深瀬は端末を操作しつつ、自身を狙うスナイパーへ宛てて呟いた。

「……二人も部下を殺されたんだ。こちら悪あがきをさせてもらうぞ」

特殊非常回線のロックを解除すると、複数の機密データを転送させ、最後に暗証コード十六桁を打ち込んで端末のあらゆる情報を抹消する。

例え、自分を殺した敵が端末を奪ったとしても解析できなければ無駄骨だ。

ふっと肩の力を抜き、深瀬は左の薬指にはめた指輪を撫でて微笑む。

「すまない、歌織。私は君を——」

瞬間、深瀬の意識は衝撃と爆炎へ刈りとられて吹き飛んだ。

午前六時十一分、トラック運転手の通報で駆けつけた消防隊員と警察官達が目の当たりにしたのは、業火のような炎へ焼き尽くされる一台の乗用車だけであった。

1

——義術により脳以外を人工化した人類が当たり前となった時代。世界的な都市の大半が瓦礫と廢墟へ変わつても、そこから人々の営みが消えてなくなりはしなかつた。

やや大きな波が船体をおおひ、八倉直人は船縁を掴んだ拍子に我へ返つた。

波間をぼーっと眺める内にうつらうつらとしていたらしい。昨晩よく冷えたせいで眠りが浅かつたことも原因だろう。自分でも驚くほど気が抜けていたようだ。

ロシア国旗をはためかせ、中型貨物船『ストリボーグ号』は泡沫の軌跡を海原へ引きつつ、三陸沖を北進している。風向きや波の具合は概ね良好であり、スラブ神話で風を司る神の名を与えられた船は、すっかり天候を味方につけて安定した航海を続けていた。

一月半ばということもあり、デッキへ吹きつける潮風は冷たい。だが、積み荷を護衛するロシアの男達は吹きすぎず寒風を物ともせず、自動小銃を手に鋭い視線で海を睥む。

廢墟の都『東京』を出立して早二日。海賊の魚雷艇から包囲され、ドンパチを繰り返したアクシデントを抜きにすれば、久しぶりの船旅は順調そのものであった。

金髪の少女が直人の肩上で楽しげな声を響かせる。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！ ウミネコさんがどっかいつちやう！」

「じゃあ、餌をもっと高く上げてごらん」

「おいで〜！ こっちだよ、こっち！」

モッズコート風のジャンパーを羽織り、セミロングヘアの上から犬耳フードをすっぽりと被った小柄な少女——サーニヤの掲げたパンをウミネコが啜えて飛び去る。

彼女が嬉しそうに。パタパタと足を揺らして笑った。

「わあ。ちゃんと食べてくれた！」

「おー、そっかそっか。よかったな」

サーファイアじみた瞳を輝かせる姿へ口元を緩ませ サーニヤの両足を押さえ直した。

「ほらほら、あんまり動くと海に落ちるぞ」

「大丈夫だもん。お兄ちゃん次は左！ ひーだーりっ！」

「しょうがないなあ」

サーニヤは大の動物好きだ。廃都じゃ動物とふれ合う機会が少なく、はしやぐ気持ちもよくわかる。ま、喜んでもるならいいか、と直人は親心めいた感情を抱きつつ微笑んだ。

時折、携帯ラジオの放送が風に乗って流れてきた。

『この十九年間に人類は二度の世界大戦を起こしました』

直人は厚手のフリースや防寒用のアンダーシャツを黒いダウンジャケットの下へ着込んでいるが、やはり風が当たると骨の随まで凍みるような寒さで身体が震える。

それとひきかえ、サーニャは元気がいいだ。ジャンパーの内側は白いセーターとカットパンツという服装で、彼女の防寒対策は黒ストッキングを穿いたぐらいである。

『第三次大戦は核と自律兵器の戦争でした。各国が資源とエネルギーを奪い合い、アメリカとロシアが小諸国の併合で砲火を交えました』

デッキ入口で「へくちゅっ」と間抜けなくしゃみが聞こえ、直人はドア横を窺った。東南アジア出身の少女が背を丸めて縮こまり、簡易ベンチの隅っこでふるふる震えている。

『第四次大戦は義術の戦争でした。兵士が機械の肉体を持ち、東アジアを主戦場に総力戦を行いました。同時に、我が国の正義を卑劣な敵国へ突きつける戦争でもあったのです』

彼女の名はレイヴン。ショートヘアの黒髪と美しい褐色肌の持ち主で、サーニャの保護者あるいは姉のような存在だ。普段から野戦服を着ている彼女も、今日は深緑のモッズコートで身体を包み、黒のプリーツスカートとストッキングを着用していた。

乗船前、民間人を装うよう注文をつけられ、彼女なりの努力をしたらしい。

一年前の『顔無し事件』以来、レイヴンは直人の仕事場を兼ねた自宅へ住み、サーニャを含めた他数人と疑似家族のような共同生活を送っている。

『あの大战で我々日本人は多くを失っています。東京を含む都市の大半が焼かれ、総人口の三分の一は非業の死を遂げました。このような悲劇を繰り返さないために、我々は強い日本の復興を急がなくてはならないのです』

ちなみに、レイヴンが女の子っぽい格好をしたのはこれが初めてだ。

本人曰く「似合わない」から着ないそうだが、直人は勿体ないなど密かに思っていた。

『強い日本を取り戻そう！ 平和で豊かな社会の実現を目指す自由国民党です。日本新政府広報が午前九時をお知らせします』

ポーンとお決まりの時報が流れ、レイヴンが「うるさい」と脇の携帯ラジオを叩き消す。

——第四次世界大戦と呼ばれる戦争が終結して二年が経った。

西暦二〇三五年十月一日、日本の人工密集都市へ中国と南北朝鮮軍がミサイル攻撃を行った事件により、日本人の約三分の一が何の前触れもなく死へと追いやられた。

後に『一〇一事変』と呼ばれる事件は、東京を含めた関東圏と西日本の主要な都市や工業地帯の九割を壊滅させ、東北以西は瓦礫の散在する廃墟となった。

日本はアメリカやNATO諸国の支援を受けると、中国と南北朝鮮統一国へ報復を唱えて侵攻を開始。やがて戦火は伝染病のごとく広がり、大戦は泥沼の様相を呈していった。

しかし、約六年に及んだ大戦は、経済崩壊や社会体制の維持が困難となった戦争当事国が自主的な撤収や停戦を始めたことで事実上の終わりを迎える。

数多の小国と都市は地図から消え、各国の勢力も戦前と比べて大きく損なわれた。第四次世界大戦について、ほとんどの歴史家は口を揃えて述べたという。

——この大戦に勝者はいない。死体の山と焼け野原があるだけだ。

大戦中、レイヴンとサーニャは旧日本国防陸軍の兵士だった。通称「少佐」で知られる元軍人、神近梓<sup>かみちあき</sup>の指揮した『第113特殊戦闘部隊』へ所属し、

鉄火場を駆ける死の猟犬として恐れられ、味方からは陰で「外人部隊」と蔑まれた。彼女達の背負う過去は暗く悲惨だ。レイヴンは人民解放軍へ親族を殺され、反中ゲリラに身を投じた過去がある。サーニヤも小さな身体で複雑な事情を抱えていた。

彼女は旧国防軍に『記憶洗浄処置』で記憶を改竄され、精神構造や人格の一部を上書きされた挙句、戦闘や殺人に対する躊躇いや恐怖、善悪の観念を歪められてしまった。

その後遺症で肉体は十四歳だが、精神年齢は六歳で止まっており、消された記憶も失われたまま戻らない。そのうえ、心の成長を取り戻せる見通しも立っていないかった。

ぽんぽんと頭を押しされ、直人が首を上向けた。

「お兄ちゃん。ウミネコさんお家に連れてっていいい？」

「えッ。アレを飼うのかッ!？」

「うん！ サーニヤが毎日お世話するっ！」

ウミネコは個体にもよるが全長五十センチ、翼を広げると百二十センチにもなる。カモメ科の中ではミドルサイズとはいえ、インコを籠で飼うのとはスケールが違う。

「え、えーつと……そう！ ウミネコは海じゃないと暮らせないんだ！ だから、な？」

「えーつ！ お家でもご飯あげたかったのに……」

彼女が動物を飼いたいとせがむのは間々あることだ。ペットを一匹飼ってあげたいところだが、犬猫じゃ済まないレベルの生き物までねだるため、宥めるのも一苦勞である。

戦後、彼女達は軍を脱走して傭兵となった。

神近の経営する傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の社員となり、廃都・東京で銃を片手に日々を生きている。ちなみに、直人も神近との契約で傭兵を副業としていた。

ただし、神近が必要と判断した時のみ、傭兵として協力するという条件付きである。そもそも、本業は『義術医』という義術化した人間を専門に診る医者だ。

西暦二〇四三年現在、脳と脳幹以外の肉体を人工部品へ置き換え可能な『義術医療』あるいは単に『義術』と呼ぶサイボーグ医療が全世界で広く普及している。

全身義術化で病死者は大幅に減少し、数多ある難病も治療可能となった。だが、人工部品のメンテナンスを怠れば機能不全は免れない。それゆえ、義術医が生まれた。

ただし、直人は医師免許を持たないモグリだ。それでも鬼才の女医から知識と技術を叩き込まれ、廃都の患者を何百人と診る中で、すっかり腕利きとして知られるようになった。

突然、サーニヤが慌て声を出した。

「あゝっ！ だめっ！ ケンカしちゃめっ！」

やや目線を上向ければ、大小二羽のウミネコがパンを奪おうと翼で互いを押しやっている。結局、彼女がパンをうっかり落とした途端、別の一羽がサツと啜え去ってしまった。

「……ウミネコさんのご飯なくなっちゃった」

「大丈夫だよ。あいつらは自力で魚を捕れるからな」

「……でもケンカしてたよ？」

「あれは……神近さんとナタリアさんみたいなものかな」

「本当は仲良し？」

「そうそう。よく似た者同士」

そっかあとサーニヤを納得させられた一方、コホンと咳払いが聞こえ、直人は戦々恐々とした面持ちで振り返る。雑誌モデルのようなロシア美女が冷たく笑っていた。

「誤解を招く表現は止めてくれないかしら？ 八倉君」

紺色のレディーススーツの上へ黒いロングコートを羽織り、鮮やかな金髪のポニーテールを風へ揺らしながら、ナタリア・クラインがふんと小さく鼻を鳴らす。

「私があのだと似た者同士ですって？ ナンセンスよ！ 絶対ありえないわ！ それともなにかしら？ ドクター・八倉は私と野蠻人が同じに見えると？」

「……わりと気質は似てるんじゃないかなあと……」

「寒中水泳どう？ よく冷えてるわよ」

「どうもスミマセンでした。……で、ご要件は？」

「二時間後に港へ入るわ。そろそろ下船の準備をしておきなさい」

「了解。レイヴンにも伝えとくよ」

ナタリアが「よろしくね」と踵を返して船内へ入った。

彼女はスペツナズ所属の元ロシア軍人だ。ロシアマフィア『ワルシャワゲート』の一員であり、日本支部に限ればナンバー2の最高幹部でもある。

実のところ、この船はワルシャワゲートの武器や物資を運ぶ輸送船だ。コンテナの護衛を

担う男達は、ナタリア直属の部隊にいたロシア陸軍の元兵士達で組織の構成員である。

サーニヤを肩から下ろして言った。

「じゃあ、サーニヤは荷物をまとめてくれ。できるな？」

「うん！ わかった！」

と、彼女は元氣よく返事をして船室に駆け下りて行く。レイヴンが入れ替わりで近づいて来るものの、夢遊病患者のようなフラフラした足取りはおぼつかない。

途端、直人の懐へ吸い寄せられるようにひつついた。

「おい？ ちょ、ちょっと待て！ 待ってば！」

慌てふためく直人を尻目に、レイヴンは色っぽい声を漏らして顔をすり寄せる。

ぴったり身体を押し当てるせいで、首筋へかかる吐息がむず痒いうえ、胸の感触がじかに伝わって柔らかい。しかも柑橘系の香水が鼻腔をくすぐって眠っていた官能を疼かせる。

彼女の子猫めいた仕草にドギマギしながら訊いた。

「い、いきなりどうしたんだよ？」

「……………さびい。おやすみ」

そう言うが早いか、ダウンジャケットへ顔を埋め、ピクリとも動かなくなってしまう。

一人置いてきぼりを食った状態から、直人がハッと意識を呼び戻した。

「レイヴン、レイヴン寝るな！ 寝るならベッドにしろ！」

「……………あとにじかん……………」

「二時間後は下船だよッ！ ほら起きろって！」

ゆさゆさと肩を揺すると、レイヴンが欠伸をかみ殺して駄々をこねる。

「……やだ。ナオトがいい。あつたかいし……」

「俺を布団がわりにするな！」

レイヴンが無視して目を瞑り、直人は溜息をつくと諦めの境地で抱き支えた。

彼女は二人きりだと幼児退行とまでは言わないが、クールな普段の振る舞いを一転させ、やたら子供っぽい甘え方をする。もちろん、時と場所さえ考えてくれるなら、彼女が甘えてくれるのは嬉しいし嫌いじゃなかった。直人は嘆息して心当たりを口にした。

「昨日も眠れなかったのか？」

「……無理。寒すぎ」

マイナス十度の船外よりマシとはいえ、貨物船の部屋はかなり冷える。直人はヒーターの近いベッドを使わせようとしたが、彼女は自分が譲ると言つて聞く耳を持たなかった。

レイヴンが眠たげな目を擦つてもぞもぞと動いた。

「ナオトが風邪引いたら困る。私は風邪引かないから」

「それで寝不足じゃ意味ないだろ……」

「だから今寝る。おやすみ」

「……はあ。一時間したら起こすからな」

レイヴンはそれで妥協したのか、リラックスした表情で体重を預けてくる。

彼女の艶やかな髪を撫でて、直人はふと思いつ出した。

こいつと出会ってもう一年くらい経つんだよな……。

かれこれ、親友以上恋人未満という曖昧な関係を表面上は一年も続けている。

いつだったか、彼女が「ゆっくりでいい。今の関係も好き」と微笑みながら教えてくれたことがあった。だとしても、彼女の優しさへ甘え続けるのが正しいとは思っていない。

どこかで、お互いの関係をはっきりさせる必要がある。でも、自分にそれを決める資格があるのかどうかと考えたとき、仄暗い影が纏わりついて執拗に邪魔をする。

それは過去という名の因縁だ。

かつて直人は数々の軍事工作と暗殺任務へ従事する特殊作業員だった。

両親を殺害した敵国を討つため、憎悪と怒りを糧として何十、何百と血塗れの戦いを経て敵の骸を積み上げた。しかし、その果てにあったのは初恋だった女性の死だ。

彼女が命と引き換えに暴いた真実のおかげで、自分の裁くべき敵を知ることができた。

あらゆる元凶は、義術医療の生み親にして血の繋がった祖父——八倉甚<sup>やぐらしん</sup>。

第四次大戦が終結した二年前、日本の最も安全な場所にいた男は生死すら不明のまま忽然と消息を絶った。だが、あの男が行っていた数々の悪行はわかっている。

……八倉甚。あんたは今どこにいる？

虚空を睨み据えたとき、雷鳴じみた轟音を残して戦闘機の編隊が上空を通過した。

どれも機体色はダークグレー。クリップモデルタ翼という三角形の頂点を水平に切ったよ

うな翼へ日の丸が描かれており、北を目指して飛び去っていった。

レイヴンがむくりと顔を上げる。

「……なに、今の？」

「自律型戦闘機。日本新政府のだよ」

あれは恐らくJF-16『八咫鳥』<sup>ヤタガラス</sup>だろう。高いステルス性と運動性能を備えた第六世代の自律型戦闘機で、第四次大戦末期にロールアウトされた国産機である。

第三次大戦以来、各国空軍の主力はオートキル機能を備えた自律型戦闘機となった、防空地あるいは空母から発艦した後、人工知能が自己判断で敵機や目標を攻撃するのだ。

一応パイロットは存在しているが、基地や母艦の管制センターから必要に応じて遠隔操作するだけの存在だ。故に、現代のトップガンは空を飛ばずして敵機を屠る。

ちょうど水平線に霞がかかった三陸海岸が見える。

肉眼だと少し判りづらいが、絶壁じみた海岸や隆起した岩場は険しい山谷を作り、激しい波が打ちつけるたびに飛沫を散らした。ここは岩手県の南部だ。なだらかな海岸段丘の北部と違って、南部はリアス式海岸のため、複雑に入り込んだ沈没海岸が目立つ。

現在、あの辺りは日本新政府軍の後方基地がある。そこから飛び立ったのだろう。

いよいよ目的地へ近づきつつあるらしい。これから向かう地は、日本新政府と戦争状態にある北の小国——日本からの完全独立を宣言した『北海道民主共和国』だ。

どうして廃都から遙々やって来たのか？

その理由は約四日前まで遡る――。

2

巡回診療から帰宅するなり、直人はリビングの招かざる客を見て仏頂面となった。

「あの人ら何やってんだ……」

ぐつぐつ煮える鍋を挟んで、神近梓とナタリアが終始無言で睨み合う。

サーニャのおねだりで今晚はすき焼きだった。だから、レイヴンがパニッシャーのドクロを描いた黒いエプロン姿で火加減を見ている理由はそのまま納得できる。

ただ、廃都の「危険な女ランキング」万年上位の二名を招待した覚えはない。

レイヴンがキツチンへ戻りがてら直人の帰宅へ気づいて微笑んだ。

「おかえり。ナオト」

「なあレイヴン……」

「大丈夫。ナオトのお肉は分けてある」

……そうじゃない。いや、その心遣いは嬉しいけどな。

「あの二人は？」

「ナタリアがお肉を持って来た。少佐はたかり」

彼女は簡潔な答えを残し、パタパタと慌ただしく鍋の様子を見に戻る。

センターテーブルの両側に三人用のソファがある。神近が右、ナタリアは左を陣取り、レイヴンの鼻歌をBGMとして相手を呪い殺しそうな視線を浴びせ合っていた。

「少佐。もう食べ頃」

「あいよ。鍋奉行ご苦労さん」

神近が束ねた黒髪を揺らし、ビールの空き缶を背後へ放った。

スーツ姿のナタリアと違い、彼女はナイフを咥えたシベリアンハスキーの部隊章を肩横に付けた野戦服を着ている。あの部隊章は、ブラックドッグズの戦歴を物語るシンボルだ。

レイヴンはミニコンロのツマミをカチッとひねって火を落とす。

瞬間、神近とナタリアがカッと目を開き、視認不能な速さで鍋を穿つ。両者の箸が挟んだのは一枚の柔らかそうな牛肉。いつの時代も高級品な霜降りのリブロース――。

神近がひどく愉快そうに喉奥を震わせた。

「おい、女狐。あたしの肉に箸が当たってるよ。どけな」

「違うわよ駄犬。私の肉にあなたの箸が当たってるのよ。どけなさい」

「わかってないねえ年増。この肉はあたしのもんだ。どけな」

「寝言は寝てから言いなさい野蛮人。私が用意した私の肉よ。どけなさい」

神近の額へ青筋が浮き、ナタリアの箸はミシッと嫌な音を立てる。二人が唐突に笑い出したかと思えば、どちらも揃って立ち上がり、リビングのドアを指さして怒鳴った。

「「いい度胸だッ！ 表に出やがれクソビッチッ！」」

ぎやあぎやあ喧しい大人を余所に、サーニャがテーブルの下から這い出る。今まで隠れていたようで、ちゃっかり二人の肉も自らの皿へ回収するとキッチンに撤収して行った。

直人がうんざり顔で傍らのレイヴンを見た。

「お引き取り願ってくれ。実力行使も許可する」

「無理。私じゃ相手にならない」

「……そういや、倉庫に余った麻酔があつたな」

「ナタリアの牛肉は天然物。だから私達も贅沢できる。許してあげて」

彼女の声は心なしか少し弾んで聞こえた。まあ、天然物の牛肉となれば無理もない。

第三次大戦の核戦争で農地が激減して以来、世界の食卓は合成食品で占められている。

故に、天然物の食材は今や高級品だ。肉類は牧草地の確保が難しいせいで家畜一頭当たり

のコストが嵩み、天然物となれば驚くほど高値で取引されていた。

「ふうん。ナタリアさんがねえ……」

さつきよりも渋い表情となり、一人掛けのソファアへ腰を下ろした。レイヴンは無邪気に喜んでいるが、日本には「タダより高い物はない」という素晴らしい諺がある。

まだ誹謗中傷合戦を続けている二人を見据え、直人がわざとらしく咳払いをした。

「で？ あんたらはいつまで遊んでる気だ？」

ようやく家主の存在へ気づいたのか、どちらも舌打ちして座った。ビジネスパートナーの関係でありながら、二人はどういうわけか個人レベルだと絶望的にソリが合わない。

「さっさと用件を済ませてくれ。どうせ、晩飯食うために来たんじゃないだろ」  
神近は不思議そうな顔で新しいビール缶を開けた。

「え？ あたしは晩飯たかりに来ただけよ？」

「……あなたには言つてねえよ。それと飲んだ缶を散らかすな」

ナタリアが真面目な表情で述べた。

「あなたに依頼があつてね。八倉君」

「俺に？ 神近さんじゃなくて？」

「強いて言うなら神近もよ」

神近が狼犬を彷彿とさせる凶悪な笑みを口辺へ滲ませる。

「アンタが手土産持参でホームパーティーに来るなんて妙だと思つたよ」

「あら？ オマケの誰かさんに言われたくないわね」

「普通の夕食だ！ それで？ 依頼は傭兵の案件だな？」

ナタリアは「当然」と首肯する。そして足下のジュラルミンケースからタブレットの軍用端末を取り、直人が見やすいようテーブルへ画面を立てて置いた。

「あなた達も知つての通り、我々ワルシヤワゲートはロシア政府と密接な繋がりを持つている組織よ。だから時には祖国の意向へ沿つた仕事を請け負うこともあるの」

「密接どころじゃないだろ。闇の代理人つて言つた方が正しいんじゃないのか？」

「どうかしらね。八倉君の想像に任せるわ」

タブレットの電源を点け、ロシア語のウェブサイトを開いた。直人がサイトバナーを読んで眉を寄せる。

「モスクワ警備コンサルタント？」

「我々が持つ架空会社の一つよ。とある国で活動するためのね」

ほとんどの諜報機関は、自国や他国にいくつかの拠点を持っている。それらは表向きこそ合法的な会社や住居だが、実態は非合法的な工作部隊を運用する隠れ家として使われていた。

特務機関時代、直人も架空会社を利用した経験が多々あった。

「とある国ってのは？」

「北海道民主共和国」

直人はおろか神近までも言葉を失う。

「北海道が完全独立したって噂は本当だったのか……」

「ええそうよ。一年半前、日本新政府から独立を宣言した小国よ。北海道国は日本新政府と現在も戦争状態にあるの。『津軽海峡戦線』と呼ばれる北緯四十一度線を境にね」

現代の北海道を語るには、少しばかり社会情勢の話をしなければなるまい。

西暦二〇四一年五月、日本臨時政府は戦後に『日本新政府』と改称し、暫定首都と定めていた宮城県仙台市を正式な新首都へ制定した。ようやく平和な時代が始まると大半の国民がホッとしたのも束の間、日本新政府は強硬な政策を次々と打ち出した。

まず東北地方と北海道を国土と定義し、東北以西の土地を全て切り捨てた。

その理由は一〇一事変で受けた甚大な被害にある。あの事件で東北より西は壊滅的な被害を被っており、仮に国土と規定した場合、復興作業で莫大な金と手間がかかる。

戦中に放棄された東京や関東圏は復興不能と考えてもいい。

そのため、第四次大戦で財政の疲弊した新政府はそれらを見捨てたのだ。

次に『流入難民規制法』を施行して、山形から福島の間境に沿って国境線を引き、日本人でも健康や年齢、性別で入国を制限する『国民選別審査』を始めた。

アメリカやロシア、EU圏でも国民選別審査は行われている。戦前からは想像もつかない馬鹿げた話だが、そうしなければ財政や社会体制を維持できないのが実情であった。

こうした国々の中でも、日本は審査が特に偏向した国と言われている。

例えば、政府筋や特権階級層を除けば、外国人に審査を受ける資格はない。中国や南北朝鮮国籍の者は、危険分子として即時逮捕され、強制収容所送りにされるという。

これは俗に『閉鎖政策』と揶揄されたが、批判者は反政府勢力やテロリストの烙印を押されるにあつて、真つ向から異を唱える者や反対運動を行う者は誰も現れなかった。

ナタリアが煙草を啜えて火を点ける。

「……ただ、ある軍人の影響で北海道は違った。軍事衛星を介した中継放送で新政府を非難した挙句、現地の駐留軍を率いてクーデターを起こしたのよ」

彼女の吐いた紫煙が換気扇へ流れて消える。直人が眦をすつと細めた。

「北部方面軍がクーデターを？ いつ？ どの部隊が？」

「二〇四一年六月五日。旧日本国防陸軍の第4師団よ」

ナタリアへ凍えるような眼光を浴びせ、神近は葉巻煙草を啜えた。

「女狐、今回の仕事はナシだ。とっとと失せな」

直人は心の底から驚いた。神近はギャラの安い仕事を断ることは多々あるが、一応は内容を聞いてから決める。依頼の詳細を知る前に蹴るのは、これが初めてじゃないだろうか。

ところが、ナタリアは余裕とも取れる態度を見せていた。

「あらあら。その様子じゃ軍人の正体へ気づいたようね」

「当たり前でしょうが。第4師団、ブラックスカルを独自に動かしてクーデターを成功させられる軍人なんざ……あたしは一人しか知らないよ」

「神近さん。ブラックスカルってなんだ？」

「あ？ ああそつか。アンタ、第三次の頃は……二、三歳？ 若いねえ」

「当たり前だ。だいたい二十年前の戦争だぞ」

「第三次大戦からずっと北方を守ってる連中が第4師団さ。ロシア、中国から上陸するバカどもを血祭りに上げるのが仕事。んで、師団の義術化大隊が使ってる髑髏マスクのアーマースーツを見た敵が『ブラックスカル』ってあだ名を付けたわけよ」

第三次大戦は義術がなかった時代の戦争だ。戦術核の応酬が繰り返され、自律兵器が戦場を埋め尽くし、それらが生身の人間を容赦なく屠殺する戦場が山ほどあったという。

そこで考案されたのが『アーマースーツ』という戦闘用装甲服だ。

ただの装甲服と違い、人工筋肉によるパワーアシストや簡易メデイカルシステムも装備された優れたもので、第三次大戦の頃は宇宙服じみたゴツイデザインが主流だった。

神近は愛用のオイルライターで煙草の先端を炙って語る。

「第4師団の参謀長閣下は、アンタの親と士官学校時代は同期だよ」

「じゃあ、神近さんとも？」

「アンタの親と同期なんだし当然でしょ。……けど、アイツは嫌いだよ」

直人が両親を亡くしたのは十三歳の時だった。神近が両親の友人として事実を包み隠さず教えてくれるまで、直人は己の両親が旧国防陸軍の軍人であるとしか考えていなかった。

本当は二人とも特務機関の所属で、母は特殊工作員、父が情報分析官だった。

ナタリアが指先で端末の画面を操作する。

「はいはい。あなたの好き嫌いはどうでもいいの。この仕事は残念だけど引き受けてもらうわよ。ロディオンはあなたを選び、モスクワの最高幹部会も承認したんだから」

彼女の口にした「ロディオン」とは、日本支部のボスであるロディオン・ガリーニンのことだ。ロディオンはスペツナズの元大佐で「ロシアの大山猫」という二つ名がある。

神近すら一目置く凄腕であり、指揮官としても優秀な人物と言えた。

「ケッ。あたしの知ったこっちゃないね」

「ありがたいの？ 報酬、六桁よ？」

「経費は？」

「別料金。全額クライアント持ち」

「……………詳細プリーズ」

直人が思わずソファからざり落ちた。

さっきまで断るとか言ってなかったか…………？

反面、ナタリアは計算通りといった様子で頷いた。

「北海道国の選挙が終わるまでの要人警護が依頼よ。現地では、我々モスクワ警備コンサルタントのオペレーターという立場で動いてもらうわ」

どうやら、民間軍事会社の武装警備員アームド・セキュリティ・スタッフになれということらしい。

直人は腕組みしながら質問する。

「警護対象は？」

ナタリアが女性の写真と経歴を画面へ映した。

たぶん、三十代前半だろう。義務化した外見は老化しないため、年齢は目安でしかない。

黒髪はセミロング、前髪を八対二くらいで分けている。どことなく気品が漂う落ち着きを感ずる一方、キリツとした目元から軍人らしい意思の強さが滲んでいた。

「萩元理央はぎもとりお。北海道国防衛大臣、北海道民政党的現党首。護衛対象は彼女よ」

「……………元陸軍大佐。第4師団、参謀長？ この人が例のクーデターを？」

「ええ。彼女は北海道独立評議会、つまり、現政権で最初に実行力を伴った行動を起こした人物よ。最初に中継放送の話をしたでしょう？ あちらでは『暁の演説』と呼んでいるそう

「ただ、彼女はその演説で第4師団を始めとした全軍を掌握したらしいわ」

「あの女、恐ろしく頭の切れるヤツだからねえ」と神近が鼻を鳴らした。

大戦中、旧国防軍の北部方面軍は人員だけで十万人、自律兵器の配備数へ至っては人員の倍を下らない。それを一人の軍人が演説で掌握したなど俄には信じがたい話である。

萩元理央の経歴にはまだ続きがあった。

「北海道独立戦争の総司令官？　なんだ、この北海道独立戦争って……」

「日本新政府がクーデター鎮圧に軍を派遣して始まった戦争よ。あちらは津軽海峡の広域へ機雷原を設置して、約二週間も戦っていたらしいわ。その時の自律機雷が原因で津軽海峡の近海は未だ航行不能……おかげで太平洋か日本海を大回りで迂回するしか航路はないのよ」

「そんなことになってたのか……」

戦争末期に軍を抜けた後、ずっと東京へ引きこもり、外界の情勢を進んで調べようともしなかったせいで、現代版の浦島太郎になったような気分だった。

「けど、俺を雇う理由は？　神近さん達で護衛は十分だろ？」

「クライアントの指定。そうとしか言えないわね」

神近がケラケラと嗤う。

「やめな女狐。アンタも隠すと面倒なのはわかってるでしょ」

「隠してるわけじゃないわ。我々の祖国は北海道国の後援者でね。我々ワルシャワゲートも多大な投資をしているの。もし、あの国がトラブルに巻き込まれて厄介な情勢となれば一番

困るのは我々よ？ そうね、二週間前だったかしら？ あちらでテロがあったとかで大使館経由のオーダーがあったのよ。萩元本人から直接ね」

「で、あたしの会社と八倉を指定したって？ どう思う？」

「……俺まで名指しなのは妙だな」

「ハッ。妙なんてもんじゃあない。キナ臭いねえこりゃ」

「どう思うかはあなた達の勝手よ。ちよつと失礼」

と、彼女は上着の内ポケットから小型端末を取り、どこかと連絡をつける。

「……待たせたわね。それじゃ本人から話を聞きましょうか」

突然、タブレットに砂嵐が走り、どこかの執務室が映った。

黒檀の机が置かれた後ろ壁で、紺の布地に赤白の五稜星を重ねた北海道旗が掲げている。

そして、萩元理央が北海道旗の真下で座していた。

神近が露骨に顔を顰める。

「萩元……」

『久しぶりね。神近』

なるほど。さっきの電話は衛星回線を開かせる連絡だったのか……。

『貴女の噂は耳にしているわ。戦中同様、壮健そうで何よりね』

「そりゃどーも。アンタも随分とやったみたいじゃない。バカ政府相手にクーデター起こしたんだって？ あの優等生が大胆な真似したねえ」

『あれは人々の正当な権利を守る武装蜂起よ。私利私欲のためじゃないわ』

萩元の言い分は理解できる。が、それは「正当な権利を守る」という大義名分があれば、武力闘争による権利主張を正当化しても良いという実例を認めることだ。

神近は人を食ったような笑みを浮かべる。

「そいつは素晴らしい。とつても耳当たりの良い、キレイなお言葉じゃないさ。テロリストどもに教えてやりな。中指を立ててキメると最高だつてね」

『変わったわね。貴女が弱者と正義のために戦っていた頃が懐かしいわ』

ギリツと奥歯を噛み、神近がドスを効かせた声で突き放す。

「……萩元。昔話が見たいなら他を当たりな」

『正論ね。ただ、ここで語れる話は残念だけど何も無いわ』

「女狐、やっぱりナシだ。あたしらは受けない」

『貴女はそれでいいでしょうね。でも、彼の返答はどうかしら？』

と、直人の顔を正面へ捉えた。

『初めまして。君の事は色々調べさせてもらったわ』

「……色々ね。それで？ 俺の何がわかった？」

『君がご両親と同じぐらい優秀な特殊工作員だった経歴。戦争末期の任務中、戦死を装って軍を脱走した事実。大切な女性の死が脱走の引金となった過去まで全て』

直人が息を呑み、警戒を顕わに尋ねる。

「あなた、何者だ？」

『安心なさい。どれも人から聞いた話よ』

いきなり画面が灰色の映像へ切り替わる。恐らく監視カメラの映像だろう。リアルタイムの日時が右上へ表示され、殺風景な取調室らしき部屋にパイプ椅子がある。

目隠しをされた少女が椅子へ拘束されていた。カメラがズームアップされ、不鮮明だった外見もはっきりし始める。瞬間、直人は血相を変えて乱暴に端末を掴んだ。

「……何をした？ 答えろ。紅音に何をしたッ！」

鬼気迫る大声を聞き、サーニヤもキツチンから顔を出した。レイヴンとナタリアが直人の豹変ぶりに目を丸くさせ、神近は少女の素性へ気づくと苦い顔つきで舌打ちする。

タブレットが萩元を再び映した。

『どうも誤解があるようね。我が国は彼女を“保護”しているだけよ』

「ふざけるなッ！ あいつを今すぐ解放しろ！」

『それは君の返答しだいよ。我々の依頼を受けるなら、私の責任において彼女を解放すると約束しましょう。ただし断るようなら……必要措置を取らざる負えないわね』

「くっ……………」

『よい返事を期待しているわ。神近、貴女もね』

と、一方的な要求を突きつけて画面はブラックアウトした。

直人がテーブルを苛立ち紛れに殴りつける。

……こいつは依頼じゃない。脅迫だ。

バリバリと後ろ頭を搔き、神近が大きく両肩を落とした。

「ちえっ。わかったよ。受けりゃいいんでしょ？ けど、あたしが派遣するヤツを決める。八倉を外さなきゃいいわけっしょ？ じゃあ他は好きにさせてもらうさ」

「……そうねえ。それくらいなら先方も納得するかしら？ いいわ。許可しましよ」

神近は啞え煙草で立ち上がり、直人の肩を軽く小突いてドア口へ向かう。

「レイヴン、サーニャ！ あとで事務所だ。忘れるんじゃないよ」

ナタリアも荷物をまとめると腰を上げた。

「八倉君。我々は萩元と必ずしも歩調を合わせているわけじゃないのよ」

「なに？」

「ごちそうさま。また来るわ」

ナタリアは意味深な微笑を湛え、真意を語ることなく立ち去った。

リビングが元の静けさを取り戻し、直人はソファアに背を預けて押し黙る。厳しい表情で両腕を組んだとき、レイヴンの手がそっと右肩へおかれた。

「さっきの……」

「大丈夫だ。お前は気にしなくて……」

——何もかも見透かされている。

そう錯覚しそうなぐらい、彼女の瞳は真っ直ぐだった。

「私はユキシマサキにはなれない。でも、ナオトを支えたいと思ってる」  
雪島沙希。かつて愛した女性ひとは二度と帰らない——。

彼女の手に触れて、直人は目を瞑った。

「東明寺紅音。俺と組んだもう一人の相棒だ」

3

西暦二〇四〇年三月十二日、午前二時十一分。作戦開始まで六〇五秒——。

直人がサイバーグラスの視覚表示を切ると格納庫へアナウンスが流れた。

〈降下十分前、整備班は退避せよ。オペレーター、軌道の入力数値を再チェック〉

コックピットからの指示が下り、ハッチの外を慌ただしい足音が通り過ぎてゆく。

十分後、自分に乗せた降下ポッドは輸送機の腹を放り出され、高度一万メートルから時速

三百キロで自由落下を始める。降下地点は、ロシアとモンゴル北部の国境付近だ。

今回の任務は、日本国防軍から流出した作戦機密を持ち、ロシア対外情報庁と接触を図ろうとしている人民解放軍情報部の大佐をこの世から葬り去ることだ。

この手の任務は何度も経験した。第307特務機関で「暗殺者」のコードネームを与えられた特殊作業員として、十六歳から四年も暗殺任務と破壊工作へ従事してきた。

心地良さとは無縁のシートへ背を預け、直人は虚ろな瞳で闇を見つめる。

半年前、雪島沙希が死んだ日にあらゆるモノを失った。怒り、悲しみ、喜びを始めとした

感情、自身が戦っていた理由、生きる目的、そして希望をなくしてしまった。

彼女は相棒で、親友で、初めて愛した女性だった。彼女は人民解放軍に殺害された両親の復讐へ傾倒する直人の危うさを按じ、復讐をやめさせようと真実を探って殺された。

彼女を殺したのは自分だ。自分の憎悪が愛しい人を死へと至らしめた。

だから彼女の後を追おうと危険な任務ばかり就いた。だが、身体へ染みつく兵士の習慣が死の臭いを敏感に嗅ぎ分け、生存本能へ忌々しいほど強力な生還を促して抗った。

そうして時が過ぎゆく中で、雪島沙希の面影や痕跡を探し回っては、彼女を喪った現実へ突き放される。気づけば、自分の心は孤独に蝕まれてポロポロと崩れ落ちていた。

あらゆる苦痛が限界へ達したとき、直人は彼女の遺言に縋る道を選んだ。

〈格納庫内の減圧開始。 降下開始まで残り五分——〉

降下ポッドから余分な空気が抜け、外殻がピキピキと卵の殻を割るような音を立てながら軋んでゆく。これが始まったら最終段階——減圧終了後に射出準備へ移るはずだ。

右耳のイヤホンが電子音を発し、プライベートの秘匿回線が開いた。

『……直くん。ちょっといいかな』

少女の澄んだ声が躊躇いがちに許可を求める。

「紅音か。なんだ」

第一作戦班所属、東明寺紅音。沙希と同じ特殊工作員をサポートする情報分析官であり、彼女が死んでからは専属の「相棒」として支援担当へ就いた戦友である。

『本当にやるの……?』

「何度も言ったはずだ」

『でも! でも何かもつと別の方法だって……』

今回の作戦中、直人は行方不明となる。大佐を回収するロシアの特殊部隊と想定外の交戦が行われ、通信機器や装備のビーコンが途絶。事実上の戦死と判断される手筈だった。

すべて脱走を意図した偽装工作だった。八倉直人は記録上で死者となり、特殊工作員だった過去を捨てて別の生き方を選ぶ。それは、彼女が死に際に望んだ願いでもあった。

親友の技術担当官と紅音の協力で下準備は終わり、あとは降下開始を待つだけの状態だ。

「紅音。俺の考えは変わらない」

『私じゃダメ……なのかな』

紅音の想いは痛いほど解っていた。沙希を喪った悲しみを忘れるために、彼女の優しさへ溺れるのは魅力的だと思う。でも、沙希の代わりを求めるような行為はしたくなかった。

だからこそ無言を貫いた。たぶん、彼女もそれを察している。

『ねえ、直くん。私は気にしないよ』

「俺が嫌なんだ」

『沙希ちゃんを裏切るから?』

「お前を傷つけるからだ」

『……優しいね。だから、沙希ちゃんも好きになったのかな』

二人の会話へ降下シーケンスのアナウンスが割り込む。

〈格納庫内の減圧正常、各ポッド固定位置よし。降下三分前。降下ハッチ開放せよ〉  
ガクンとポッドが縦に揺れ、風音が聞こえ始めた。

輸送機の底部ハッチが開いたのだ。電源供給が断たれ、ポットの制御がスタンドアローンへ切り替わる。そろそろ、電磁加速射出器のシリンダーが加速を始める頃に違いない。

『あの、直くん。えっと、その……』

紅音が必死で言葉を探していた。

ポッド射出後は敵の通信妨害を受けるため、こちらは予定通り交信をカットする。

〈ケーブル解除。降下一分前、カウント開始——〉  
つまり、これが最後の会話だ。

『また、また絶対に会えるよね？』

「これで最後だ。お前や三月が狙われるからな」

戦死が偽装で脱走と判れば、すぐさま追っ手がかかる。特殊作員の離叛者は抹殺されるのが基本だ。その任務も経験がある。故に、彼女と会うことも二度とないだろう。

紅音が「それでも！」と涙声で遮った。

『ずっと待ってるから！ 直くんが帰って来るの待ってるから！ だから——』  
カウントの読み上げがゼロを告げる。

〈セーフティロック解除、降下開始。幸運を祈る〉

全身を射出の衝撃が激しく揺さぶり、やがて心地よい浮遊感へと包まれる。重力の枷から解かれる瞬間だ。が、すぐに強力なGで身体は押しつけられ、ポットは落下し始める。ジャミングの影響下に入ったせいかわ、紅音の声はもう聞こえない。通信ログを消して交信を切り、直人は胸中でそっと呟いた。

ありがとう。さよなら、紅音。

# Black Dogs 4

- 北方動乱編 -

黒ねこ作

■発行日■

2017年12月31日(C93) 初版第1刷発行

■著者・編集■

黒ねこ作

Twitter (@gretelproject)

Email : projectblackcat2011@gmail.com

■イラスト■

ムク

Twitter (@mku\_48)

■表紙デザイン■

船木渡(船木同人ワークス)

<http://funakidw.com>

■印刷所■

株式会社ちょこっと(ちょ古っ都製本工房)

<http://www.chokotto.jp>

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複製(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。



北方  
動亂  
編

# TRAVELER